

おわりに

総合地球環境学研究所

阿部 健一

「地球研では教育はしない。」初代所長の日高敏隆さんの言葉だ。

ただこの言葉は、そのまま受け取らないほうがいい。正確に言えば、制度的な教育はしない、ということだ。大学院教育にしても、いったん制度化されると「教育する」ことだけが目的化してしまう。地球研は、教育機関ではなく最新の研究をする研究機関であることを、日高さんは強調しておきたかったのだと思う。

一方、研究に専念していると、逆に教育の大切さが見えてくる。教育は、研究者としても大切なことだ。

日高さん自身が、実のところ素晴らしい「教育者」だった。「こんな研究があつてね……」と楽しそうに話をされる。聞いていると、わくわくしてくる。研究することの楽しさを伝えるのが上手だった。

地球研では今でも、わくわく感、という言葉が飛び交うことがある。研究のための研究。既存の手法を繰り返すだけの研究。そこには高揚感はまったくない。「そんな研究やって面白いのですか」などと失礼にも聞こえる質問もでてくる。意地悪で質問したわけではない。素直にわからないから聞いている。研究者の間でも、専門が違えば理解しえないことが多い。

質問を受けたほうは、一瞬「なぜ僕はこの研究をしているのだろう」とたじろぎ、次に自分と研究を振り返ることになる。そして「僕の研究は……」とおもむろに説明する。自分の研究の楽しさを伝えることができると、素直にうれしいと思う。

洛北高校で行った授業は、だから、地球研のひとりひとりの研究者が、自分の研究をもとに、研究の楽しさを伝えることから始めた。

それは、さほど難しくはなかったように見えた。みんな楽しくて研究をやっているからだろうし、生徒さんも熱心に聞いてくれていた。ただわかってもらうためには準備が大変だったはずだ。研究者の間では了解事項のことも、丁寧にわかりやすく説明しなければならない。専門用語もできるだけ避けるようにする。「高校生にわかるように話せなければ一流の研究者じゃないよ」。日高さんはよくそんなことを言っていた。本当に分かっていないと、わかりやすく話せないのだ。授業の準備は、自分の研究を見つめなおすきっかけでもあったと思う。

そのうえで、授業の後半は、みんながグループになって実際に、自分の研究に取り組んでもらうことにした。わくわくするような研究を経験してもらいたい。具体的には、自分たちで課題を見つけ、仮説を構築し、検証のための調査を行い、その結果を分析、発表するという作業を一通り行うことである。

課題解決型学習という言葉が頻りに耳にするようになってきている。文科省でも、学習指導要領のなかで、強調している点だ。今までのような受動的な学習ではなく、主体的な学びが「生きる力」だという。

悪いことではない。単に知識を詰め込んでも仕方がないだろう。得た知識は、実際に問題を解決するために活用する。課題解決を目的とすることで、考える力を養うことができる。後半の授業はまさにこの課題解決型の授業を率先して行おうというものである。

仮説をたて、検証のために実験やフィールドでのデータ収集を行う。得られた結果が仮説を支持するものかどうか検討する。最後の発表も、工夫が必要である。こうした研究の一つ一つのプロセスがそれぞれ重要である。しかし、われわれが一番力を注いだのは、課題を見つけるという最初の部分である。それは、課題解決のための課題発見ではない、ということは強調しておいたほうがいだろう。

課題解決というときかなり堅苦しく感じる。だいたい社会にあるさまざまな問題は、簡単に解決できるようなものではない。ただ解決しがたい問題とみえるものでも、ちょっと違った角度からみるとさほど重要な問題でなくなることはある。今までと違った見方で見てみるのが、研究するうえで、もっとも大切なことなのである。

研究の楽しさは、誤解をおそれずに言えば、課題に答えをだすことではない。それに今社会が抱える多くの課題は一つの「正答」があるわけではない。本当の楽しさは、いい問いかけができたときにある。

洛北高校の生徒さんのこれまでの課題にそれがあらわれている。一緒に授業を行ってよかったことの一つだ。いい問いかけを見つけるためには「対話」が大切なこともわかってきた。一人で考えると大変なことも、仲間とともに考えることで、楽しくなる。「対話」をすることで、既存の見方からも自由になることだ。

地球研にとっても「対話」は大切だ。教育も貴重な「対話」の場だったのかもしれない。洛北高校の生徒さんは、大事な対話の相手だった。最後に、生徒さん一人一人とかかわっていただいた方々に感謝の気持ちを表しておこうと思う。